

東京大学所蔵のニホンオオカミ剥製標本

本州産クマガラ研究会代表、岩手県立博物館 藤井忠志



日本最後のニホンオオカミ *Canis lupus hodophilax* は、1905年（明治38年）奈良県東吉野村鷲家口でマルコム・アンダーソンという若いアメリカ人学者が持ち込まれたオスのオオカミを購入したものである。ニホンオオカミを少しかじっている方だったらこの逸話を知らない方は皆無と思われる。

今日ここでとりあげたいのは、東京大学大学院農学生命科学研究室で所蔵する我が岩手県産のメスのニホンオオカミのルーツについてである。現在、次年度の企画展「野生動物と生きる」のために、ホンシュウジカとツキノワグマに関する様々な文献と記録を調べていたが、興味深い一文が目にとまった。

「1881年（明治14年）に岩手県から購入」とだけ記録されたこのオオカミだが、以前から「岩手県のどこだろう？ 県北の方かな？」などと自分なりに予想を立てていたのだが。。。なぜならば、黒沢家所蔵のニホンオオカミ？の毛皮といい、オオカミの死体埋葬現場など二戸市を中心とする岩手県北にオオカミに関する話題は多いからだ。

また盛岡藩の家老執務日誌ともいえる「盛岡藩雑書」（盛岡市教育委員会1987）に記された狼害の記録のほとんどは、久慈市周辺のもので圧倒的に多い。例えば、

「久慈北野鹿毛母駄去月二十日ニ、御野之内大沢と

申所にて、狼ニ被取候由石井新三郎書付を以上ル由、毛馬内彦兵衛今日披露之」

「所々御野馬狼ニ被取候事、久慈北野栗毛駒当歳壹疋、母駄捨り乳はなれて候て当五月二十四日之晩死候由、又重野青黒毛母駄壹疋、同野鹿毛駄貳歳壹疋、同二十七日晩狼ニ被取候由、又重野青黒毛駄貳歳壹疋、同六月七日晩狼ニ被取候由、相内野青毛駄貳歳壹疋、同二日晩狼ニ被取候由、又重野栗毛駄母同九日之晩狼ニ被取候由、野田三崎野栗毛駄貳歳壹疋五月十八日之晩狼ニ被取候由、又重野青黒毛駄貳歳同二十七日」

「之晩狼ニ被取候由、右之通書付七通にて石井新三郎三戸より越候由にて、毛馬内彦兵衛七通之書付持参候て披露之」

「若殿様昨晚寅ノ刻ニ、川目山ハ御鹿狩御出被遊、御供弥六郎、兵助、七左衛門、権兵衛、御勢子大将衆中野伊織、楢山五太夫、鹿四拾三、猪鹿一ツ、狼三ツ、酉ノ中刻、御帰城」

「久慈北野栗毛母駄正月晦日之晩、狼ニ被取申ニ付、御野馬別当より石井新三郎方へ申断候ニ付、新三郎書上有、二月三日付之手形、今日竹林五兵衛上ル」

これらは寛文8～9年（1668～1669年）の記録である。大事な南部駒が、オオカミに襲われたことが逐一報告されている。

その他、森（1969）の九戸地方史のなかの八戸藩日

誌によると「天保11年(1840年)、藩はマタギに鉄砲を交付し、オオカミ1疋について1貫分の褒賞を与えている」。さらに現在の久慈市にあたる「野田通御代官所諸御用呼出書抜帳」や侍浜村の「久慈御用留帳」には、オオカミの人畜に与える被害・不安は大きいので、藩民協力してその撲滅にあたり、毒打・銃殺・わな・斬殺等あらゆる方法がとられ、狼取という職業も成立している。特に毒打としては「はんめう・なもみ・くも・かなへび」の4品を黒焼きにしたものを馬肉や鯨肉に入れて食わせたと言っているが、この程度の毒で果たしてオオカミは死ぬのか?どうか疑問が残る。しかし、これら毒殺の方法は、明治期になりアメリカから輸入した猛毒の硝酸ストリキニーネにより終焉を迎え、ニホンオオカミもついには野生下から消滅してしまう結果に至る。

閑話休題。その一文「幻の気仙オオカミ」(東海新報1997)によると、気仙郡日頃市(現:大船渡市日頃市町平山)に嘉永生まれの専門マタギ・村上作右エ門の話しからだが、「明治初期、笠詰山(五葉山麓)にシカ狩りに行ったところ、大窪山の方から何百ともしれないオオカミの大群が吠えながら走ってくるのを見て、そのあまりの恐ろしに堪えかね、木の梢に登ってその様子を見ていたところ、木の下を恐ろしい吠え声とおびただしい足音で走り抜け、その頃からどこへ移動したものか、オオカミの姿は見えなくなった」という内容。明治初期がいつを指すのか?定かではないが、岩手県から購入した明治14年前後には、日頃市一帯でオオカミを盛んに駆除していたようだ。馬をはじめとする家畜などへの被害が大きいとして、県が駆除目的に賞金つきで捕獲を奨励していたからだ。当時1頭あたり8円だったというから、かなりの大金になる。日頃市村長の月給が3円33銭の時代だから、オオカミ1頭が2ヶ月半分 に相当する金額で、県がいかに狼害を重視していた

かが推測できる。

これだけから東大のオオカミ=日頃市産と断定するのはあまりにも早計と思われるが、ニホンオオカミについてたどるのはそのサンプル数の少なさから困難がきまとう。また、伝聞や言い伝え等は科学的根拠に欠ける部分があり、信頼度に難があるなど、ニホンオオカミを巡る議論はいつも挫折の連続である。

しかし日頃市界限には、以前から組山と称する狩猟集団が存在する。約200年前、釜石市南部の唐丹(とうに)に鈴木伊助という猟師の発案で組織されたハンターグループ「組山」は、旧暦の10月16日から12月27日まで5~6回猟を行い、毎年シカとイノシシをあわせて400頭前後捕ったという。しかも、遠野(とおの)から皮商人が来て、組山に対して醤油一斗五升、猟師ひとりに1日米一升を提供し、獲物の肉と交換したらしい。切り立った断崖絶壁の多い沿岸部で、しかもヤマセにより米の収穫が少なかった沿岸部の人々にとって、米や醤油の入手は死活問題だったに違いない。この組織は1903年(明治36年)まで続き、その後、いったんは解散したが、1915年再組織され(岩手県 1982)、1934年(昭和9年)で幕を閉じている。

以上のようなことから、地元の方々はこの東大のオオカミが日頃市産のものと信じているが、真偽のほどは定かではない。

文献

- 岩手県(1982)『岩手県林業史』
 森嘉兵衛(1969)山林産業の経営と展開 九戸地方史[上巻] 九戸地方史刊行会 久慈市
 盛岡市教育委員会 盛岡市中央公民館(1987) 盛岡藩雑書第2巻(明暦二年~寛文十年)
 東海新報(1997)1997年1月15日付け記事

藤井忠志(ふじい・ただし)

1955年、秋田県大館市生まれ。秋田大学教育学部数学科卒業後岩手県の中学校に勤務。北東北三県を中心に、世界的分布において南限に近い、本州産クマゲラ個体群の生息生態調査を精力的に行なってその保護と研究に携わっている。本州産クマゲラ研究

会代表・岩手県立博物館学芸第三課長。Ph. Doctor(学位:生物学、動物生態学)

著書に「クマゲラにまつわる記憶(盛岡タイムス社・1955)」「ガイドブック クマゲラ(盛岡タイムス社・1997)」「本州のクマゲラ(緑風出版・1999)」「ブナの森から-クマゲラとともに-(本の森・2003)」「北東北のクマゲ

ラ(東奥日報社・2004)」「北東北 森の博物誌(本の森(2007))」など。また、ビデオ制作も手がけ、「本州のクマゲラ」は下中教育財団映像コンクールで最優秀賞受賞、「クマゲラとブナ林」は全国デジタルミュージアム映像コンクール地域部門の奨励賞を受賞。他、論文多数。(引用:本の森などより-G)